

物理問題 I

$M \gg m, \mu$ とする。

(1)

ア $\frac{GMmr}{R^3}$ イ $2\pi\sqrt{\frac{R^3}{GM}}$

解説

ア

半径 r の球と地球との相似比は $r : R$ だから、質量比は $r^3 : R^3$ である。

よって、半径 r の球の質量は $M \cdot \left(\frac{r}{R}\right)^3$

ゆえに、点 P において質点に働く重力の大きさは $\frac{GmM\left(\frac{r}{R}\right)^3}{r^2} = \frac{GmMr}{R^3}$

イ

O を原点とし、右向きに r 軸をとると、質点を受ける重力（復元力） F は、

$r > 0$ のとき $F < 0$ 、 $r < 0$ のとき $F > 0$ だから、 $F = -\frac{GMm}{R^3}r$

よって、質点の加速度を a_m とすると、その運動方程式は $ma = -\frac{GMm}{R^3}r$

ゆえに、質点は O を振動中心とし、周期 $2\pi\sqrt{\frac{m}{\frac{GMm}{R^3}}} = 2\pi\sqrt{\frac{R^3}{GM}}$ の単振動をする。

(2)

ウ $\sqrt{2GM\left(\frac{1}{R} - \frac{1}{R+h}\right)}$ エ $\sqrt{GM\left(\frac{3}{R} - \frac{2}{R+h}\right)}$ オ $\left|\frac{\mu-m}{\mu+m}\right|\sqrt{GM\left(\frac{3}{R} - \frac{2}{R+h}\right)}$

カ $\frac{2\mu}{\mu+m}\sqrt{GM\left(\frac{3}{R} - \frac{2}{R+h}\right)}$

解説

ウ

重力の位置エネルギーの基準位置を無限遠にとり、質点 A がトンネルに入る瞬間の速度を v_{AR} とすると、質点 A が地表からの高さ h の位置にあるときとトンネルに入る瞬間

における力学的エネルギー保存則の式は $0 + \left(-\frac{GM\mu}{R+h}\right) = \frac{1}{2}\mu v_{AR}^2 + \left(-\frac{GM\mu}{R}\right)$

よって、 $|v_{AR}| = \sqrt{2GM\left(\frac{1}{R} - \frac{1}{R+h}\right)}$

別解

重力の位置エネルギーの基準位置を O にとり、
 質点 A が地表にあるときの重力の位置エネルギーを U_R
 地表からの高さ h にあるときの位置エネルギーを U_{R+h} とすると、
 $U_{R+h} - U_R$ は質点 A を地表から地表からの高さ h まで移動させるときに外力がする仕事
 と等しい。

これと $r > R$ のとき質点 A に働く万有引力の大きさは $\frac{GM\mu}{r^2}$ であることから、

$$U_{R+h} - U_R = \int_R^{R+h} \frac{GM\mu}{r^2} dr \equiv \left[-\frac{GM\mu}{r} \right]_R^{R+h} = GM\mu \left(\frac{1}{R} - \frac{1}{R+h} \right)$$

よって、 $\frac{1}{2}\mu v_{AR}^2 + U_R = 0 + U_{R+h}$ および $|v_{AR}| = \sqrt{2GM \left(\frac{1}{R} - \frac{1}{R+h} \right)}$ より、

$$|v_{AR}| = \sqrt{2GM \left(\frac{1}{R} - \frac{1}{R+h} \right)}$$

エ

解法 1: 単振動運動の視点からの力学的エネルギー保存則で解く

質点 A がトンネルに入ってから O を振動中心とする単振動運動になる。

質点 A の単振動運動の運動方程式は、 ア , イ の解法と同様にして、

$$\text{その加速度を } a_A \text{ とすると } \mu a_A = -\frac{GM\mu}{R^3} r$$

よって、質点 A が O に到達する直前の速度を v_{AO} とすると、

$$\text{単振動運動の力学的エネルギー保存則の式 } \frac{1}{2} \frac{GM\mu}{R^3} R^2 + \frac{1}{2} \mu v_{AR}^2 = 0 + \frac{1}{2} \mu v_{AO}^2$$

および $|v_{AR}| = \sqrt{2GM \left(\frac{1}{R} - \frac{1}{R+h} \right)}$ より、

$$\begin{aligned} |v_{AO}| &= \sqrt{\frac{GM}{R} + v_{AR}^2} \\ &= \sqrt{\frac{GM}{R} + 2GM \left(\frac{1}{R} - \frac{1}{R+h} \right)} \\ &= \sqrt{GM \left(\frac{3}{R} - \frac{2}{R+h} \right)} \end{aligned}$$

解法 2: 重力の視点からの力学的エネルギー保存則で解く

中心 O を位置エネルギーの基準位置にとると、

地表における質点 A の重力の位置エネルギー＝

質点 A を O から地表まで移動させるときに外力がする仕事

これと $0 \leq r \leq R$ のとき、質点 A に働く重力の大きさが $\frac{GM\mu}{R^3}r$ であることから、

$$\text{地表における質点 A の重力の位置エネルギーは } \int_0^R \frac{GM\mu}{R^3} r dr = \left[\frac{GM\mu}{2R^3} r^2 \right]_0^R = \frac{GM\mu}{2R}$$

よって、力学的エネルギー保存則の式 $\frac{GM\mu}{2R} + \frac{1}{2}\mu v_{AR}^2 = 0 + \frac{1}{2}\mu v_{AO}^2$

$$\text{および } |v_{AR}| = \sqrt{2GM\left(\frac{1}{R} - \frac{1}{R+h}\right)} \text{ より, } |v_{AO}| = \sqrt{GM\left(\frac{3}{R} - \frac{2}{R+h}\right)}$$

オ・カ

衝突直後の質点 A の速度を v_{AO}' 、質点 B の速度を v_{BO}' とすると、

$$\text{弾性衝突だから, } \frac{v_{AO}' - v_{BO}'}{v_{AO} - 0} = -1 \quad \therefore v_{BO}' = v_{AO}' + v_{AO} \quad \dots \textcircled{1}$$

衝突直前と直後で運動量が保存されるから、 $\mu v_{AO} = \mu v_{AO}' + m v_{BO}' \quad \dots \textcircled{2}$

$$\textcircled{1} \text{ を } \textcircled{2} \text{ に代入し, 整理すると, } v_{AO}' = \frac{\mu - m}{\mu + m} v_{AO} \quad \dots \textcircled{3}$$

よって、

$$\begin{aligned} |v_{AO}'| &= \left| \frac{\mu - m}{\mu + m} v_{AO} \right| \\ &= \left| \frac{\mu - m}{\mu + m} \right| |v_{AO}| \\ &= \left| \frac{\mu - m}{\mu + m} \right| \sqrt{GM\left(\frac{3}{R} - \frac{2}{R+h}\right)} \quad \dots \textcircled{カ} \end{aligned}$$

①, ③より、

$$\begin{aligned} v_{BO}' &= v_{AO}' + v_{AO} \\ &= \left(\frac{\mu - m}{\mu + m} + 1 \right) v_{AO} \\ &= \frac{2\mu}{\mu + m} v_{AO} \end{aligned}$$

$$\text{よって, } |v_{BO}'| = \frac{2\mu}{\mu + m} \sqrt{GM\left(\frac{3}{R} - \frac{2}{R+h}\right)} \quad \dots \textcircled{カ}$$

問 1

地表から飛び出す瞬間の質点 B の速度を v_{BR} とすると、力学的エネルギー保存則より、

$$\frac{1}{2}mv_{BR}^2 + \frac{GMm}{2R} = \frac{1}{2}m\left(\frac{2\mu}{\mu+m}\sqrt{GM\left(\frac{3}{R}-\frac{2}{R}\right)}\right)^2$$

$$\therefore \frac{1}{2}mv_{BR}^2 = \frac{GMm}{2R}\left\{\left(\frac{2\mu}{\mu+m}\right)^2 - 1\right\} \dots \textcircled{1}$$

また、無限遠方に飛び去るための条件は、 $\frac{1}{2}mv_{BR}^2 - \frac{GMm}{R} \geq 0 \dots \textcircled{2}$

$$\textcircled{1}, \textcircled{2} \text{より}, \frac{GMm}{2R}\left\{\left(\frac{2\mu}{\mu+m}\right)^2 - 1\right\} - \frac{GMm}{R} \geq 0$$

これと $\frac{GMm}{2R}\left\{\left(\frac{2\mu}{\mu+m}\right)^2 - 1\right\} - \frac{GMm}{R} = \frac{GMm}{2R}\left\{\left(\frac{2\mu}{\mu+m}\right)^2 - 3\right\}$ より、 $\left(\frac{2\mu}{\mu+m}\right)^2 \geq 3$

よって、 $\frac{2\mu}{\mu+m} \geq \sqrt{3} \therefore \frac{\mu}{m} \geq 2\sqrt{3} + 3 \dots \text{(答)}$

補足 1

質点 B の速度の万有引力と平行な成分の運動エネルギーは万有引力の仕事を受けるので減少するが、質点 B の速度の万有引力と垂直な成分の運動エネルギーは万有引力の仕事を受けないので変化しない。

補足 (楽だが記述上面倒になるので補足とした)

中心 O を位置エネルギーの基準位置とすると、無限遠の位置エネルギーは中心 O に対する地表の位置エネルギーと地表に対する無限遠の位置エネルギーの和で与えられるから、

$$\frac{GMm}{2R} + \lim_{h \rightarrow \infty} \left\{ GMm \left(\frac{1}{R} - \frac{1}{R+h} \right) \right\} = \frac{GMm}{2R} + \frac{GMm}{R} = \frac{3GMm}{2R}$$

よって、満たすべき条件は $\frac{1}{2}mv_{BO}^2 + 0 \geq \frac{3GMm}{2R}$

これと $|v_{BO}| = \frac{2\mu}{\mu+m}\sqrt{GM\left(\frac{3}{R}-\frac{2}{R}\right)} = \frac{2\mu}{\mu+m}\sqrt{\frac{GM}{R}}$ より、

$$\frac{1}{2}m\left(\frac{2\mu}{\mu+m}\right)^2 \frac{GM}{R} \geq \frac{3GMm}{2R} \therefore \frac{2\mu}{\mu+m} \geq \sqrt{3}$$

ゆえに、 $\frac{\mu}{m} \geq 2\sqrt{3} + 3 \dots \text{(答)}$

(3)

キ $\frac{GMm}{R^3}x$ ク $\pi\sqrt{\frac{R^3}{GM}}$

解説

キ

力の大きさを $|F_x|$ とすると,

$$\begin{aligned} |F_x| &= \frac{GMm}{R^3} r \sin \angle POO' \\ &= \frac{GMm}{R^3} r \cdot \frac{x}{r} \\ &= \frac{GMm}{R^3} x \end{aligned}$$

ク

キ および運動が地表で静止した状態から始まることから, 質点の運動は

地表を振動端点, O' を振動中心とする周期 $2\pi\sqrt{\frac{m}{\frac{GMm}{R^3}}} = 2\pi\sqrt{\frac{R^3}{GM}}$ の単振動であり,

反対側の地表に出るまでかかる時間は $\frac{1}{2}$ 周期だから, その時間は $\pi\sqrt{\frac{R^3}{GM}}$

(4)

ケ m コ $(2\sqrt{33} + 11)m$

解説

ケ

解法 1: 運動量保存則と単振動運動から解く

衝突直前の質点 A の速度を V_A ,

衝突直後の質点 A と質点 B の速度をそれぞれ V_A' , V_B とすると,

衝突直前と直後の運動量保存則より, $\mu V_A = \mu V_A' + m V_B \dots \textcircled{1}$

弾性衝突だから, $\frac{V_A' - V_B}{V_A} = -1 \therefore -V_A = V_A' - V_B \dots \textcircled{2}$

① - $\mu \times$ ② より, $V_B = \frac{2\mu}{\mu + m} V_A \dots \textcircled{3}$

質点 A の運動を O' を振動中心とする単振動と見なすと, $|F_x| = \frac{GM\mu}{R^3}x$ より,

質点 A の単振動の位置エネルギーは $\frac{1}{2} \cdot \frac{GM\mu}{R^3}x^2$ と表わせ,

質点 A が地表にあるときは $x = \frac{\sqrt{3}}{2}R$ だから、その位置エネルギーは $\frac{3GM\mu}{8R}$ となる。

よって、力学的エネルギー保存則より、 $\frac{1}{2}\mu V_A^2 = \frac{3GM\mu}{8R} \quad \therefore V_A^2 = \frac{3GM}{4R} \quad \dots \textcircled{4}$

ゆえに、 $\textcircled{3}$ と $\textcircled{4}$ より、衝突直後の質点 B の運動エネルギーは $\frac{1}{2}mV_B^2 = \frac{3GM\mu^2 m}{2(\mu+m)^2 R}$

質点 B が地表にあるときの位置エネルギーは、A と同様にして、 $\frac{3GMm}{8R}$

よって、満たすべき条件は $\frac{3GM\mu^2 m}{2(\mu+m)^2 R} \geq \frac{3GMm}{8R}$ 、すなわち $\left(\frac{\mu}{\mu+m}\right)^2 \geq \frac{1}{4}$

これと $\frac{\mu}{\mu+m} > 0$ より、 $\frac{\mu}{\mu+m} \geq \frac{1}{2} \quad \therefore \mu \geq m$

補足：点 O を基準位置とした万有引力位置エネルギーから V_A^2 を求めると

質点 A が O から距離 r にあるとき質点 A が受ける万有引力は $\frac{G\left(\frac{r}{R}\right)^3 M\mu}{r^2} = \frac{GM\mu}{R^3}r$

よって、O からの距離が a であるときの万有引力の位置エネルギーを U_a とすると、外力が万有引力にした仕事（正の仕事）と等しいから、

$$U_a = \int_0^a \frac{GM\mu}{R^3} r dr = \left[\frac{GM\mu}{2R^3} r^2 \right]_0^a = \frac{GM\mu}{2R^3} a^2$$

これより、質点 A が O' にあるときと地表にあるときの位置エネルギーはそれぞれ

$$U_{\frac{R}{2}} = \frac{GM\mu}{2R^3} \left(\frac{R}{2}\right)^2 = \frac{GM\mu}{8R}, \quad U_R = \frac{GM\mu}{2R^3} R^2 = \frac{GM\mu}{2R}$$

よって、 $\frac{1}{2}\mu V_A^2 + \frac{GM\mu}{8R} = 0 + \frac{GM\mu}{2R} \quad \therefore V_A^2 = \frac{3GM}{4R}$

あるいは、

$$U_R - U_{\frac{R}{2}} = \int_{\frac{R}{2}}^R \frac{GM\mu}{R^3} r dr = \left[\frac{GM\mu}{2R^3} r^2 \right]_{\frac{R}{2}}^R = \frac{3GM\mu}{8R} \text{ より、} \frac{1}{2}\mu V_A^2 - 0 = \frac{3GM\mu}{8R} \quad \therefore V_A^2 = \frac{3GM}{4R}$$

解法 2 : 力学的エネルギーと弾性衝突から解く

質点 B の運動を O' を振動中心とする単振動と見なすと, $|F_x| = \frac{GMm}{R^3}x$ より,

質点 B の単振動の位置エネルギーは $\frac{1}{2} \cdot \frac{GMm}{R^3}x^2$ だから,

質点 B が地表にあるときの位置エネルギーは, $x = \frac{\sqrt{3}}{2}R$ より, $\frac{3GMm}{8R}$

よって, 衝突直後の質点 B の速さを v_B とすると,

$$\frac{1}{2}mv_B^2 \geq \frac{3GMm}{8R} \quad \text{すなわち} \quad v_B^2 \geq \frac{3GM}{4R} \quad \text{となればよい。}$$

質点 A の運動も O' を振動中心とする単振動と見なし, 衝突直前の速さを v_A とすると, 力学的エネルギー保存則より,

$$\frac{1}{2}\mu v_A^2 = \frac{3GM\mu}{8R} \quad \therefore v_A^2 = \frac{3GM}{4R}$$

$\mu = m$ のとき

弾性衝突の性質より, 衝突直前と直後で質点 A の速さと質点 B の速さが交換される。

※証明は簡単だが覚えておくこと

よって, $v_B^2 = v_A^2 = \frac{3GM}{4R}$ より, $v_B^2 \geq \frac{3GM}{4R}$ を満たす。

$\mu > m$ のとき

$$v_B > v_A \quad \text{となるのは明らかだから,} \quad v_B^2 > v_A^2 = \frac{3GM}{4R}$$

よって, $v_B^2 \geq \frac{3GM}{4R}$ を満たす。

$\mu < m$ のとき

$$v_B < v_A \quad \text{となるのは明らかだから,} \quad v_B^2 < v_A^2 = \frac{3GM}{4R}$$

よって, $v_B^2 \geq \frac{3GM}{4R}$ を満たさない。

以上より, $\mu \geq m$ であればよい。

補足

解法 1 より楽だが, \square のことを考慮すると, この解法は適切ではない。

☐

質点 B が地表から飛び出すときの速度を V_{BR} とし、

万有引力の位置エネルギーの基準位置を無限遠にとると、

質点 B が再び地表にもどってくるための条件は $\frac{1}{2}mV_{BR}^2 - \frac{GMm}{R} < 0$

$$\frac{1}{2}mV_{BR}^2 < \frac{GMm}{R} \quad \dots \textcircled{1}$$

また、質点 B の運動を O' を振動中心とする単振動と見なすと、

地表の質点 B と衝突直後の質点 B についての力学的エネルギー保存則より、

$$\frac{1}{2}mV_{BR}^2 + \frac{3GMm}{8R} = \frac{1}{2}mV_B^2 \quad \therefore \frac{1}{2}mV_{BR}^2 = \frac{1}{2}mV_B^2 - \frac{3GMm}{8R} \quad \dots \textcircled{2}$$

ここで、☐の解法 1 の③ $\left(V_B = \frac{2\mu}{\mu+m}V_A\right)$ と④ $\left(V_A^2 = \frac{3GM}{4R}\right)$ より、

$$\begin{aligned} \frac{1}{2}mV_B^2 &= \frac{1}{2}m \cdot \left(\frac{2\mu}{\mu+m}\right)^2 V_A^2 \\ &= 2m \cdot \left(\frac{\mu}{\mu+m}\right)^2 \cdot \frac{3GM}{4R} \\ &= m \cdot \left(\frac{\mu}{\mu+m}\right)^2 \cdot \frac{3GM}{2R} \end{aligned}$$

これと②より、

$$\frac{1}{2}mV_{BR}^2 = m \cdot \left(\frac{\mu}{\mu+m}\right)^2 \cdot \frac{3GM}{2R} - \frac{3GMm}{8R} \quad \dots \textcircled{3}$$

①, ③より、

$$m \cdot \left(\frac{\mu}{\mu+m}\right)^2 \cdot \frac{3GM}{2R} - \frac{3GMm}{8R} < \frac{GMm}{R} \quad \left(\frac{\mu}{\mu+m}\right)^2 < \frac{11}{12}$$

$$\text{これと } \frac{\mu}{\mu+m} > 0 \text{ より, } \frac{\mu}{\mu+m} < \frac{\sqrt{33}}{6} \quad \therefore \mu < (2\sqrt{33} + 11)m$$

問 2

質点 B が地球を飛び出した瞬間の速度を v_{BR} ,

地球から最も離れた瞬間の速度とそのときの O からの距離をそれぞれ v_{Br} , r とすると,

力学的エネルギー保存則より,

$$\frac{1}{2}mv_{BR}^2 + \left(-\frac{GMm}{R}\right) = \frac{1}{2}mv_{Br}^2 + \left(-\frac{GMm}{r}\right)$$

これと $\frac{1}{2}mv_{BR}^2 = \frac{GMm}{2R}$ より,

$$\frac{1}{2}mv_{Br}^2 - \frac{GMm}{r} + \frac{GMm}{2R} = 0 \quad \dots \textcircled{1}$$

地球を飛び出した瞬間の質点 B の速度の向きと中心 O 方向のなす鋭角は 30°

地球から最も離れた瞬間の質点 B の地球中心方向の速度成分は 0 だから,

v_{Br} と中心 O 方向のなす角は 90° になる (放物運動の最高点と同じ状況)。

これと面積速度一定の法則から,

$$\frac{1}{2}r|v_{Br}|\sin 90^\circ = \frac{1}{2}R|v_{BR}|\sin 30^\circ \quad \therefore |v_{Br}| = \frac{R}{2r}|v_{BR}|$$

これと $\frac{1}{2}mv_{BR}^2 = \frac{GMm}{2R}$ より,

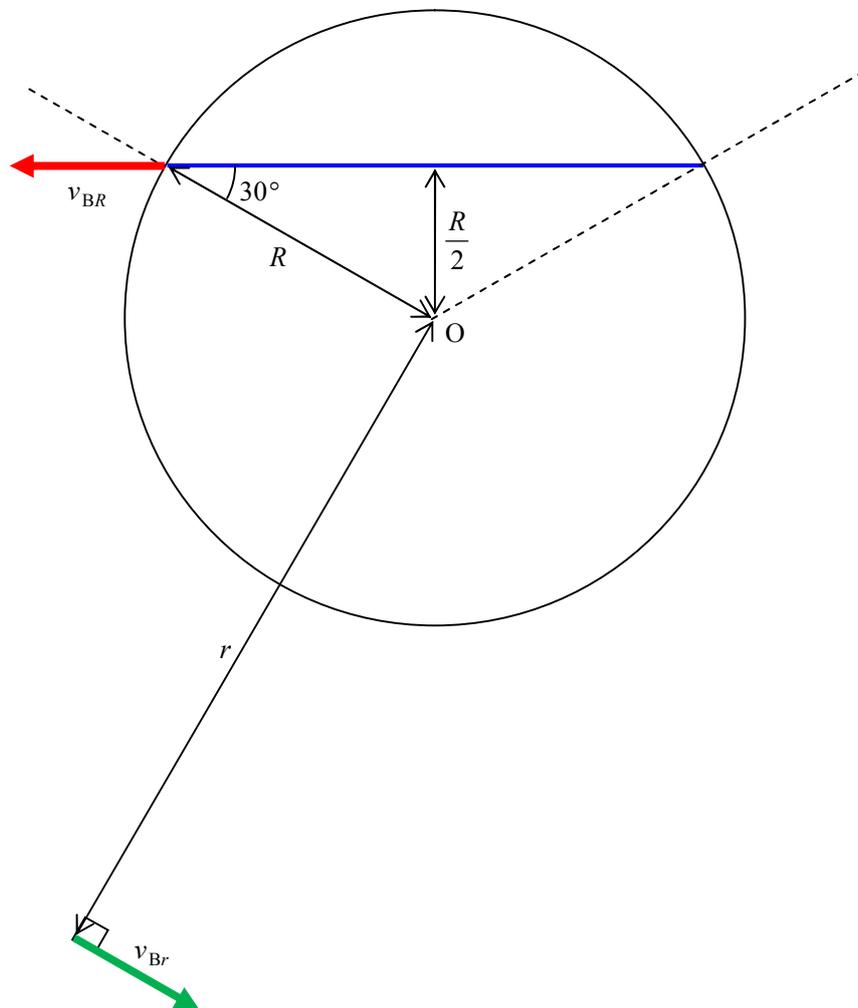
$$\begin{aligned} \frac{1}{2}mv_{Br}^2 &= \frac{1}{2}m\left(\frac{R}{2r}v_{BR}\right)^2 \\ &= \frac{R^2}{4r^2} \cdot \frac{1}{2}mv_{BR}^2 \\ &= \frac{R^2}{4r^2} \cdot \frac{GMm}{2R} \\ &= \frac{GMmR}{8r^2} \end{aligned}$$

これを①に代入すると, $\frac{GMmR}{8r^2} - \frac{GMm}{r} + \frac{GMm}{2R} = 0 \quad \therefore \frac{R}{8r^2} - \frac{1}{r} + \frac{1}{2R} = 0$

両辺に $8Rr^2$ 倍し, r について整理すると, $4r^2 - 8Rr + R^2 = 0$

これと $r > 0$ より, $r = \frac{2+\sqrt{3}}{2}R \quad \dots \text{(答)}$

参考図



万有引力を受ける速度成分は 0 になるから $v_{Br} \cdot \vec{r} = 0$ になる。

注意

等速円運動となるためには、 $m \cdot \frac{v_{Br}^2}{r} = \frac{GMm}{r^2}$ となる必要がある。

このとき力学的エネルギー保存則の式 $\frac{1}{2}mv_{BR}^2 + \left(-\frac{GMm}{R}\right) = \frac{1}{2}mv_{Br}^2 + \left(-\frac{GMm}{r}\right)$

および $\frac{1}{2}mv_{BR}^2 = \frac{GMm}{2R}$, $\frac{1}{2}mv_{Br}^2 = \frac{GMm}{2r}$ より、 $\frac{GMm}{2R} - \frac{GMm}{R} = \frac{GMm}{2r} - \frac{GMm}{r} \therefore R = r$

$R \neq r$ より不適

よって、 $v_{Br} \cdot \vec{r} = 0$ となるのは一瞬であり、質点 B の運動は等速円運動とはならない。

物理問題 II

(1)

イ $\frac{q^2 d}{2\varepsilon_0 S}$ ロ $\frac{q^2(d + \Delta d)}{2\varepsilon_0 S}$ ハ $\frac{q^2}{2\varepsilon_0 S}$

解説

イ

$$W = \frac{q^2}{2C} = \frac{q^2}{\frac{2\varepsilon_0 S}{d}} = \frac{q^2 d}{2\varepsilon_0 S}$$

(2)

ニ $\frac{\varepsilon_0 V^2}{2d^2} \cdot \frac{S_1 S_2^2}{(S_1 + S_2)^2}$ ホ $\sqrt{2} - 1$ ク $V = 2(\sqrt{2} + 1)d \sqrt{\frac{pg}{\varepsilon_0}}$

解説

ニ

解法例 1 : ハを利用して解く

面積 S_1 、面積 S_2 のコンデンサーの電気容量をそれぞれ C_1 、 C_2 とすると、

$C_1 = \frac{\varepsilon_0 S_1}{d}$ 、 $C_2 = \frac{\varepsilon_0 S_2}{d}$ のコンデンサーの直列回路だから、その合成容量は

$$\begin{aligned} \frac{C_1 C_2}{C_1 + C_2} &= \frac{\frac{\varepsilon_0^2 S_1 S_2}{d^2}}{\frac{\varepsilon_0 (S_1 + S_2)}{d}} \\ &= \frac{\varepsilon_0 S_1 S_2}{d(S_1 + S_2)} \end{aligned}$$

よって、各極板に蓄えられた電荷量を $|Q|$ とすると、

$$\begin{aligned} |Q| &= \frac{C_1 C_2}{C_1 + C_2} V \\ &= \frac{\varepsilon_0 S_1 S_2}{d(S_1 + S_2)} V \end{aligned}$$

これと ハより、極板③と極板④が引き合う力の大きさは、

$$\frac{Q^2}{2\varepsilon_0 S_1} = \frac{1}{2\varepsilon_0 S_1} \left\{ \frac{\varepsilon_0 S_1 S_2}{d(S_1 + S_2)} V \right\}^2 = \frac{\varepsilon_0 V^2}{2d^2} \cdot \frac{S_1 S_2^2}{(S_1 + S_2)^2}$$

解法例 2 : \square を利用しないで解く

極板③に蓄えられた電荷を Q ($Q > 0$), 極板③がつくる電界の強さを E とすると,

$$E = \frac{Q}{2\varepsilon_0 S_1}$$

極板④に蓄えられた電荷は $-Q$ だから,

$$\text{極板③と極板④が引き合う力の大きさは } QE = \frac{Q^2}{2\varepsilon_0 S_1}$$

これと

$$\begin{aligned} Q &= \frac{C_1 C_2}{C_1 + C_2} V \\ &= \frac{\varepsilon_0 S_1 S_2}{d(S_1 + S_2)} V \end{aligned}$$

より,

$$\begin{aligned} \frac{Q^2}{2\varepsilon_0 S_1} &= \frac{1}{2\varepsilon_0 S_1} \left\{ \frac{\varepsilon_0 S_1 S_2}{d(S_1 + S_2)} V \right\}^2 \\ &= \frac{\varepsilon_0 V^2}{2d^2} \cdot \frac{S_1 S_2^2}{(S_1 + S_2)^2} \end{aligned}$$

解法例 3 : \square を利用しないで解く

$$\text{面積 } S_1 \text{ のコンデンサーの電圧を } V_1 \text{ とすると, } V_1 = \frac{C_2}{C_1 + C_2} V = \frac{S_2}{S_1 + S_2} V \quad \dots \textcircled{1}$$

また, 面積 S_1 のコンデンサーの 1 枚の極板がつくる電界の強さを E_1 とすると,

$$\text{極板間の電界の強さは } 2E_1 \text{ だから, } V_1 = 2E_1 d \quad \therefore E_1 = \frac{V_1}{2d} \quad \dots \textcircled{2}$$

$$\textcircled{1}, \textcircled{2} \text{ より, } E_1 = \frac{S_2}{2d(S_1 + S_2)} V$$

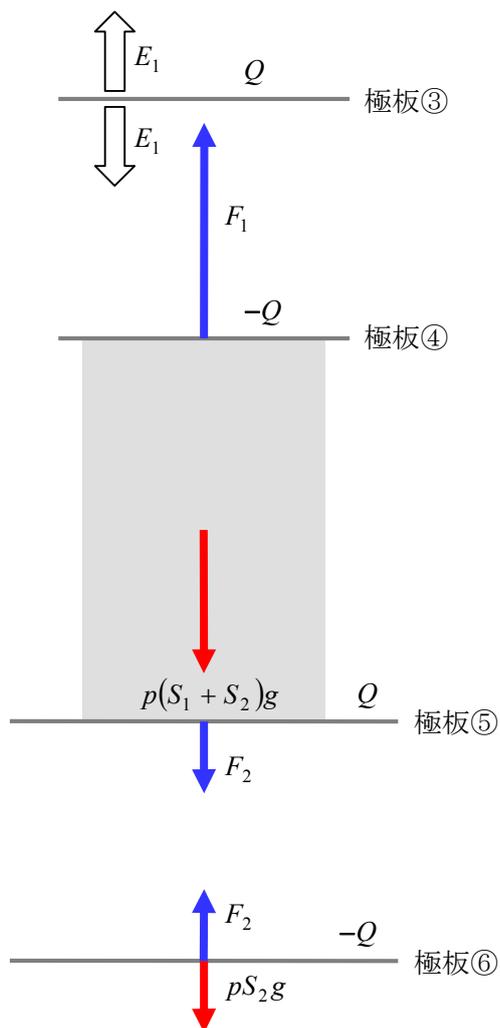
また, 極板に蓄えられた電荷量を $|Q|$ とすると,

$$\begin{aligned} |Q| &= \frac{C_1 C_2}{C_1 + C_2} V \\ &= \frac{\varepsilon_0 S_1 S_2}{d(S_1 + S_2)} V \end{aligned}$$

よって, 極板③と極板④が引き合う力の大きさは

$$\begin{aligned} |Q|E_1 &= \frac{\varepsilon_0 S_1 S_2}{d(S_1 + S_2)} V \cdot \frac{S_2}{2d(S_1 + S_2)} V \\ &= \frac{\varepsilon_0 V^2}{2d^2} \cdot \frac{S_1 S_2^2}{(S_1 + S_2)^2} \end{aligned}$$

ホ



面積 S_1 , 面積 S_2 のコンデンサーの極板間の引力の大きさをそれぞれ F_1, F_2 とすると,

極板④と⑤の一体部分に働く力のつり合いは $F_1 = p(S_1 + S_2)g + F_2 \quad \dots \textcircled{1}$

極板⑥に働く力のつり合いは $F_2 = pS_2g \quad \dots \textcircled{2}$

①に②を代入し整理すると, $F_1 = p(S_1 + 2S_2)g$

よって, $\frac{F_1}{F_2} = \frac{S_1 + 2S_2}{S_2} \quad \dots \textcircled{3}$

一方, $\textcircled{ア}$ より, $F_1 = \frac{\epsilon_0 V^2}{2d^2} \cdot \frac{S_1 S_2^2}{(S_1 + S_2)^2}$

同様に, $F_2 = \frac{\epsilon_0 V^2}{2d^2} \cdot \frac{S_1^2 S_2}{(S_1 + S_2)^2}$

よって, $\frac{F_1}{F_2} = \frac{S_2}{S_1} \quad \dots \textcircled{4}$

$$\textcircled{3}, \textcircled{4} \text{より}, \frac{S_1 + 2S_2}{S_2} = \frac{S_2}{S_1}$$

$$\text{ここで}, S_1 = kS_2 \text{とすると}, k + 2 = \frac{1}{k} \quad \therefore k^2 + 2k - 1 = 0$$

$$k > 0 \text{より}, k = -1 + \sqrt{2}$$

$$\text{補足: } \frac{F_1}{F_2} = \frac{S_2}{S_1} \dots \textcircled{4} \text{の別解}$$

極板に蓄えられた電荷の大きさを Q , 極板 $\textcircled{3}$ がつくる電界の強さを E_1 とすると,

$$E_1 = \frac{Q}{2\epsilon_0 S_1} \text{だから}, F_1 = QE_1 = \frac{Q^2}{2\epsilon_0 S_1}$$

$$\text{同様にして}, F_2 = \frac{Q^2}{2\epsilon_0 S_2}$$

$$\text{よって}, \frac{F_1}{F_2} = \frac{S_2}{S_1} \dots \textcircled{4}$$



$$F_2 = pS_2 g, \quad F_2 = \frac{\epsilon_0 V^2}{2d^2} \cdot \frac{S_1^2 S_2}{(S_1 + S_2)^2} \text{より}, \quad pS_2 g = \frac{\epsilon_0 V^2}{2d^2} \cdot \frac{S_1^2 S_2}{(S_1 + S_2)^2}$$

$$\begin{aligned} \therefore V^2 &= \frac{2pgd^2}{\epsilon_0} \left(\frac{S_1 + S_2}{S_1} \right)^2 \\ &= \frac{2pgd^2}{\epsilon_0} \left(1 + \frac{S_2}{S_1} \right)^2 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \therefore V &= \left(1 + \frac{S_2}{S_1} \right) d \sqrt{\frac{2pg}{\epsilon_0}} \\ &= \left(1 + \frac{1}{\sqrt{2}-1} \right) d \sqrt{\frac{2pg}{\epsilon_0}} \\ &= \sqrt{2}(\sqrt{2}+1) d \sqrt{\frac{2pg}{\epsilon_0}} \\ &= 2(\sqrt{2}+1) d \sqrt{\frac{pg}{\epsilon_0}} \end{aligned}$$

(3)

$$\boxed{\text{ト}} \frac{1}{k} \left(\frac{q^2}{2\varepsilon_0 S} + pSg \right) \quad \boxed{\text{チ}} \frac{q^2}{2k\varepsilon_0 S} \quad \boxed{\text{ユ}} \frac{q^2}{2k\varepsilon_0 S} \quad \boxed{\text{ヨ}} 2\pi \sqrt{\frac{pS}{k}}$$

解説

\boxed{\text{ト}}

極板⑨が極板⑩から受ける静電気力と極板⑨に働く重力 pSg の和と極板⑨がばねから受けるばねの復元力が釣り合っている。

極板⑨が極板⑩から受ける静電気力の大きさは、

$$\text{極板⑩がつくる電界の強さは } \frac{q}{2\varepsilon_0 S} \text{ だから, } q \cdot \frac{q}{2\varepsilon_0 S} = \frac{q^2}{2\varepsilon_0 S}$$

よって、ばねの自然長からの伸びを l とすると、

$$\text{極板⑩にはたらく力のつり合いの式は } kl = \frac{q^2}{2\varepsilon_0 S} + pSg \quad \therefore l = \frac{1}{k} \left(\frac{q^2}{2\varepsilon_0 S} + pSg \right)$$

\boxed{\text{チ}}

コンデンサーの放電により極板⑨と⑩の電荷が 0 になるから、

振動中心は極板⑨に働く重力とばねの復元力が釣り合う位置である。

$$\text{このときのばねの自然長からの伸びを } l_0 \text{ とすると, } kl_0 = pSg \quad \therefore l_0 = \frac{pSg}{k}$$

よって、振動中心は最初の位置から

$$\begin{aligned} l - l_0 &= \frac{1}{k} \left(\frac{q^2}{2\varepsilon_0 S} + pSg \right) - \frac{pSg}{k} \\ &= \frac{q^2}{2k\varepsilon_0 S} \end{aligned}$$

だけ上方にある。

\boxed{\text{ユ}}

最初の位置（スイッチを閉じる前）の運動エネルギーは 0 だから、

最初の位置は振動端である。

よって、振幅は

$$\begin{aligned} l - l_0 &= \frac{1}{k} \left(\frac{q^2}{2\varepsilon_0 S} + pSg \right) - \frac{pSg}{k} \\ &= \frac{q^2}{2k\varepsilon_0 S} \end{aligned}$$

☒

極板⑨の加速度を a ，ばねの自然長の位置を $x=0$ とし， x 軸を鉛直下向きにとると，その運動方程式は

$$\begin{aligned} ma &= -kx + pSg \\ &= -k\left(x - \frac{pSg}{k}\right) \end{aligned}$$

よって，極板⑨は $x = \frac{pSg}{k}$ を振動中心に周期 $T = 2\pi\sqrt{\frac{pS}{k}}$ で単振動する。

問 1

極板⑧を静止させておけなくなるのは，極板間の引力を最も小さくしても，すなわち 0 にしても

ばねの上向きの弾性力の大きさが極板⑧の重力より大きくなるときである。

よって，ばねの上向きの弾性力の大きさが極板⑧の重力以下になるように q を設定すればよい。

下図より，振動上端が自然長の位置より上にあるとき，

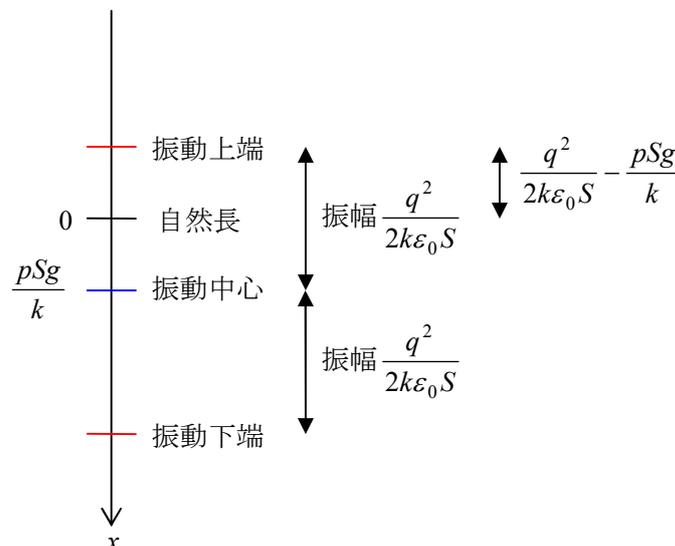
振動上端は自然長より $\frac{q^2}{2k\epsilon_0 S} - \frac{pSg}{k}$ だけ縮む。

したがって，極板⑨が振動上端に達したときのばねが極板⑧を上を押す弾性力の大きさは

$$k\left(\frac{q^2}{2k\epsilon_0 S} - \frac{pSg}{k}\right) = \frac{q^2}{2\epsilon_0 S} - pSg$$

これが極板⑧の重力以下であればよいから，満たすべき式は $\frac{q^2}{2\epsilon_0 S} - pSg \leq pSg$

$$\therefore q \leq 2S\sqrt{\epsilon_0 pg} \quad \dots (\text{答})$$



問 2

極板⑧に働く力のつり合いの式

極板⑦がつくる電界の強さは $\frac{Q(t)}{2\epsilon_0 S}$ だから、極板⑧が極板⑦から受ける静電気力の大きさは $\frac{Q(t)^2}{2\epsilon_0 S}$ よって、ばねの自然長の位置を $x=0$ とし、 x 軸を鉛直下向きにとると、極板⑧に働く力のつり合いの式は $\frac{Q(t)^2}{2\epsilon_0 S} = kx + pSg \quad \therefore Q(t)^2 = 2\epsilon_0 S(kx + pSg) \quad \dots \textcircled{1}$

極板⑨の単振動運動の式

極板⑨の振動中心は $x = \frac{pSg}{k}$ だから、その振動中心からの変位は $x - \frac{pSg}{k}$ と表される。 \square より振動の周期 $T = 2\pi\sqrt{\frac{pS}{k}}$, \square より振幅は $\frac{q^2}{2k\epsilon_0 S}$ よって、初期位相を α とすると、

$$\begin{aligned} x - \frac{pSg}{k} &= \frac{q^2}{2k\epsilon_0 S} \sin\left(\frac{2\pi}{T}t + \alpha\right) \\ &= \frac{q^2}{2k\epsilon_0 S} \sin\left(\sqrt{\frac{k}{pS}}t + \alpha\right) \end{aligned}$$

ここで、 $t=0$ のとき $x - \frac{pSg}{k} = \frac{q^2}{2k\epsilon_0 S}$ だから、 $\alpha = \frac{\pi}{2}$

$$\therefore x = \frac{pSg}{k} + \frac{q^2}{2k\epsilon_0 S} \cos\sqrt{\frac{k}{pS}}t \quad \dots \textcircled{2}$$

関数 $Q(t)$ の式

②を①に代入すると、

$$\begin{aligned} Q(t)^2 &= 2\epsilon_0 S \left(pSg + \frac{q^2}{2\epsilon_0 S} \cos\sqrt{\frac{k}{pS}}t + pSg \right) \\ &= 4\epsilon_0 pS^2 g + q^2 \cos\sqrt{\frac{k}{pS}}t \end{aligned}$$

よって、 $Q(t) = \sqrt{4\epsilon_0 pS^2 g + q^2 \cos\sqrt{\frac{k}{pS}}t} \quad \dots \text{(答)}$

物理問題 III

あ $\frac{2P_0V_0}{RT_0}$ い $\frac{P_0V_0}{RT_0}$

解説

あ・い

領域 A, 領域 B の気体の物質量をそれぞれ n_A, n_B とすると,

理想気体の状態方程式より, $n_A = \frac{2P_0V_0}{RT_0}$, $n_B = \frac{P_0V_0}{RT_0}$

(1)

う $\frac{5}{4}P_0V_0$ え $\frac{1}{2}P_0V_0$ お $\frac{7}{4}P_0V_0$ か R き $\frac{5}{3}$ く $\frac{7}{5}$

解説

う

$C_V = \frac{5}{2}R$, 気体の物質量 $= \frac{P_0V_0}{RT_0}$ だから,

内部エネルギー変化を ΔU_{B1} とすると, $\Delta U_{B1} = \frac{P_0V_0}{RT_0} \cdot \frac{5}{2}R \cdot \left(2T_0 - \frac{3}{2}T_0\right) = \frac{5}{4}P_0V_0$

え

定圧変化である。変化後の体積を V_{B1} とすると,

$B_0\left(P_0, \frac{3}{2}V_0, n_B, \frac{3}{2}T_0\right) \rightarrow B_1(P_0, V_{B1}, n_B, 2T_0)$ より, $\frac{\frac{3}{2}V_0}{\frac{3}{2}T_0} = \frac{V_{B1}}{2T_0} \quad \therefore V_{B1} = 2V_0$

よって, 気体がした仕事を W_{B1} とすると, $W_{B1} = P_0\left(2V_0 - \frac{3}{2}V_0\right) = \frac{1}{2}P_0V_0$

お

吸収した熱量 (熱エネルギー) を Q_{B1} とすると,

$Q_{B1} = \Delta U_{B1} + W_{B1} = \frac{5}{4}P_0V_0 + \frac{1}{2}P_0V_0 = \frac{7}{4}P_0V_0$

き

$C_P = C_V + R = \frac{3}{2}R + R = \frac{5}{2}R \quad \therefore \frac{C_P}{C_V} = \frac{5}{3}$

く

$C_P = C_V + R = \frac{5}{2}R + R = \frac{7}{2}R \quad \therefore \frac{C_P}{C_V} = \frac{7}{5}$

(2)

$$\boxed{\text{け}} \quad 2^{1-\frac{1}{\alpha}} V_0$$

解説

仕切板 D がストッパーに接触するまで領域 B は等温変化するから、
このときの圧力を P_{B2} とすると、 $B_1(P_0, 2V_0, n_B, 2T_0) \rightarrow B_2(P_{B2}, V_0, n_B, 2T_0)$ より、

$$P_0 \cdot 2V_0 = P_{B2} \cdot V_0 \quad \therefore P_{B2} = 2P_0$$

仕切板 D がストッパーに接触した瞬間ピストン W を停止するから、
ストッパーと仕切板の間の垂直抗力は 0 である。

よって、領域 A の圧力は P_{B2} と等しい。すなわち $2P_0$ である。

また、このときの領域 A の体積を V_{A1} 、温度を T_{A1} とすると、
 $A_0(P_0, 2V_0, n_A, T_0) \rightarrow A_1(2P_0, V_{A1}, n_A, T_{A1})$

$$\text{領域 A の変化は断熱変化だから、} \quad P_0(2V_0)^\alpha = 2P_0V_{A1}^\alpha \quad \therefore V_{A1}^\alpha = \frac{(2V_0)^\alpha}{2}$$

$$\text{よって、} \quad V_{A1} = \frac{2V_0}{2^{\frac{1}{\alpha}}} = 2^{1-\frac{1}{\alpha}} V_0$$

問 1

領域 A と領域 B を合わせた系で考える。

領域 A の内部エネルギー変化を ΔU_A 、領域 B の内部エネルギー変化を ΔU_B 、

系が外力に対してした仕事を W_1 、系が大気に対してした仕事を W_2

また、領域 A が領域 B にした仕事と領域 B が領域 A にした仕事は相殺されるから、

熱力学第一法則の式は

$$-Q = \Delta U_A + \Delta U_B + W_1 + W_2 \quad \dots \textcircled{1}$$

となる。

ΔU_A について

領域 A の気体は、定積モル比熱より、単原子分子であるから、 $U = \frac{3}{2}nRT$ で与えられる。

領域 A の気体の物質量を n_A 、変化後の領域 A の温度を T_{A1} とすると、

変化前の内部エネルギー

$$\frac{3}{2}n_A RT_0 = \frac{3}{2}P_0 \cdot 2V_0 = 3P_0V_0 \quad \dots \textcircled{2}$$

変化後の内部エネルギー

領域 B の体積は操作(1)の定圧変化で $2V_0$ になる。

その後、仕切板 D がストッパーに接触するまで領域 B は等温変化するから、

このときの領域 B の圧力を P_{B2} とすると、 $B_1(P_0, 2V_0, n_B, 2T_0) \rightarrow B_2(P_{B2}, V_0, n_B, 2T_0)$ より、

$$P_0 \cdot 2V_0 = P_{B2} \cdot V_0 \quad \therefore P_{B2} = 2P_0$$

また、仕切板 D がストッパーに接触した瞬間ピストン W を停止するから、ストッパーと仕切板の間の垂直抗力は 0 である。

したがって、変化後の領域 A の圧力は P_{B2} と等しい。すなわち $2P_0$ である。

よって、変化後の内部エネルギーは

$$\frac{3}{2}n_A RT_{A1} = \frac{3}{2} \cdot 2P_0 \cdot 2^{1-\frac{1}{\alpha}}V_0 = 3 \cdot 2^{1-\frac{1}{\alpha}}P_0V_0 \quad \dots \textcircled{3}$$

②, ③より,

$$\Delta U_A = 3 \cdot 2^{1-\frac{1}{\alpha}}P_0V_0 - 3P_0V_0 = 3P_0V_0 \left(2^{1-\frac{1}{\alpha}} - 1 \right) \quad \dots \textcircled{4}$$

ΔU_B について

領域 B は等温変化だから、 $\Delta U_B = 0 \quad \dots \textcircled{5}$

W_2 について

変化前の系全体の体積 = $2V_0 + 2V_0$

変化後の系全体の体積 = $2^{1-\frac{1}{\alpha}}V_0 + V_0$

よって、系が大気に対してした仕事は

$$W_2 = P_0 \left\{ 2^{1-\frac{1}{\alpha}}V_0 + V_0 - (2V_0 + 2V_0) \right\} = -P_0V_0 \left(3 - 2^{1-\frac{1}{\alpha}} \right) \quad \dots \textcircled{6}$$

④, ⑤, ⑥を①に代入すると,

$$-Q = 3P_0V_0 \left(2^{1-\frac{1}{\alpha}} - 1 \right) + 0 + \left\{ -P_0V_0 \left(3 - 2^{1-\frac{1}{\alpha}} \right) \right\} + W_2$$

外力が系にした仕事は $-W_1$ だから,

$$\begin{aligned} -W_1 &= Q + 3P_0V_0 \left(2^{1-\frac{1}{\alpha}} - 1 \right) - P_0V_0 \left(3 - 2^{1-\frac{1}{\alpha}} \right) \\ &= Q + P_0V_0 \left(4 \cdot 2^{1-\frac{1}{\alpha}} - 6 \right) \\ &= Q + \left(2^{3-\frac{1}{\alpha}} - 6 \right) P_0V_0 \end{aligned}$$

よって、 $Q + \left(2^{3-\frac{1}{\alpha}} - 6 \right) P_0V_0$

(3)

☐ $2^\alpha P_0$

解説

求める圧力を P_{A2} とすると、最初の領域 A の圧力と体積 $P_0, 2V_0$ が、

断熱変化により、 P_{A2}, V_0 になったから、 $P_0(2V_0)^\alpha = P_{A2}V_0^\alpha$ より、 $P_{A2} = 2^\alpha P_0$

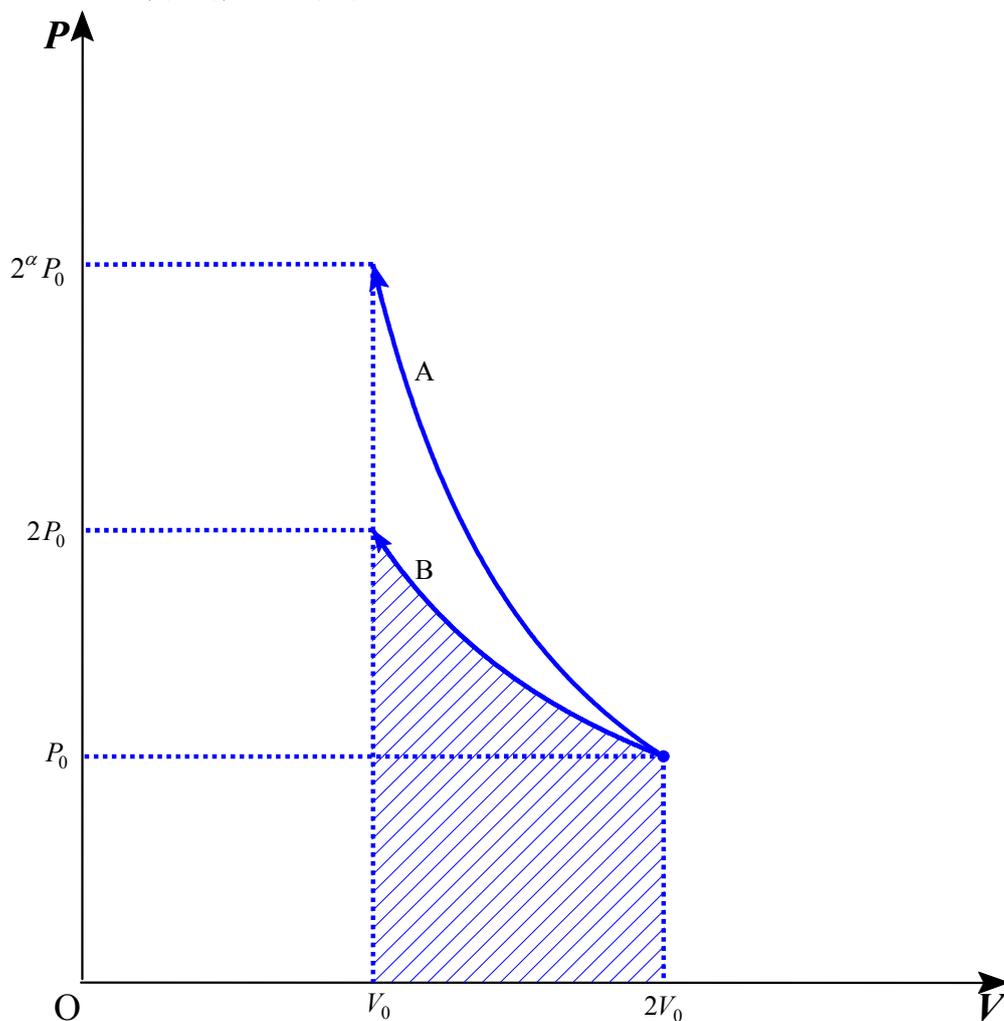
問 2

領域 A は $PV^\alpha = P_0(2V_0)^\alpha$ ($V_0 \leq V \leq 2V_0$, $\alpha = \frac{5}{3}$) で表される断熱変化であり、

変化の方向は $(P_0, 2V_0) \rightarrow (2^\alpha P_0, V_0)$

領域 B は $PV = 2P_0V_0$ ($V_0 \leq V \leq 2V_0$) で表される等温変化であり、

変化の方向は $(P_0, 2V_0) \rightarrow (2P_0, V_0)$



(4)

$$\boxed{\text{さ}} \quad 2^{\frac{\alpha}{\beta}} V_0 \quad \boxed{\text{し}} \quad \textcircled{1} \quad \boxed{\text{す}} \quad \textcircled{2}$$

解説

 $\boxed{\text{さ}}$

ストッパーから離れかけた瞬間の圧力と体積は $2^\alpha P_0$, V_0

領域 A の気体の圧力が大気圧 P_0 と等しくなったとき領域 B の気体の圧力も P_0 になる。

$$\text{この体積を } V_{B2} \text{ とすると, } 2^\alpha P_0 V_0^\beta = P_0 V_{B2}^\beta \quad \therefore V_{B2} = 2^{\frac{\alpha}{\beta}} V_0$$

 $\boxed{\text{し}}$

領域 A の変化は常に断熱変化だから, その圧力が大気圧 P_0 と等しくなったとき, 領域 A は最初の状態に戻る。よって, このときの領域 A の体積は $2V_0$

$$\alpha = \frac{5}{3}, \quad \beta = \frac{7}{5} \text{ より, } \alpha > \beta \quad \therefore \frac{\alpha}{\beta} > 1$$

ゆえに, $2^{\frac{\alpha}{\beta}} V_0 > 2V_0$

 $\boxed{\text{す}}$

PV グラフで考えると,

領域 A の気体は, $PV^\alpha = 2^\alpha P_0 V_0^\alpha$ ($V_0 \leq V \leq 2V_0$, $\alpha = \frac{5}{3}$) を,

すなわち $P = 2^\alpha P_0 \left(\frac{V_0}{V}\right)^\alpha$ ($V_0 \leq V \leq 2V_0$, $\alpha = \frac{5}{3}$) を満たしながら,

$(2^\alpha P_0, V_0)$ から $(P_0, 2V_0)$ へ断熱変化する。

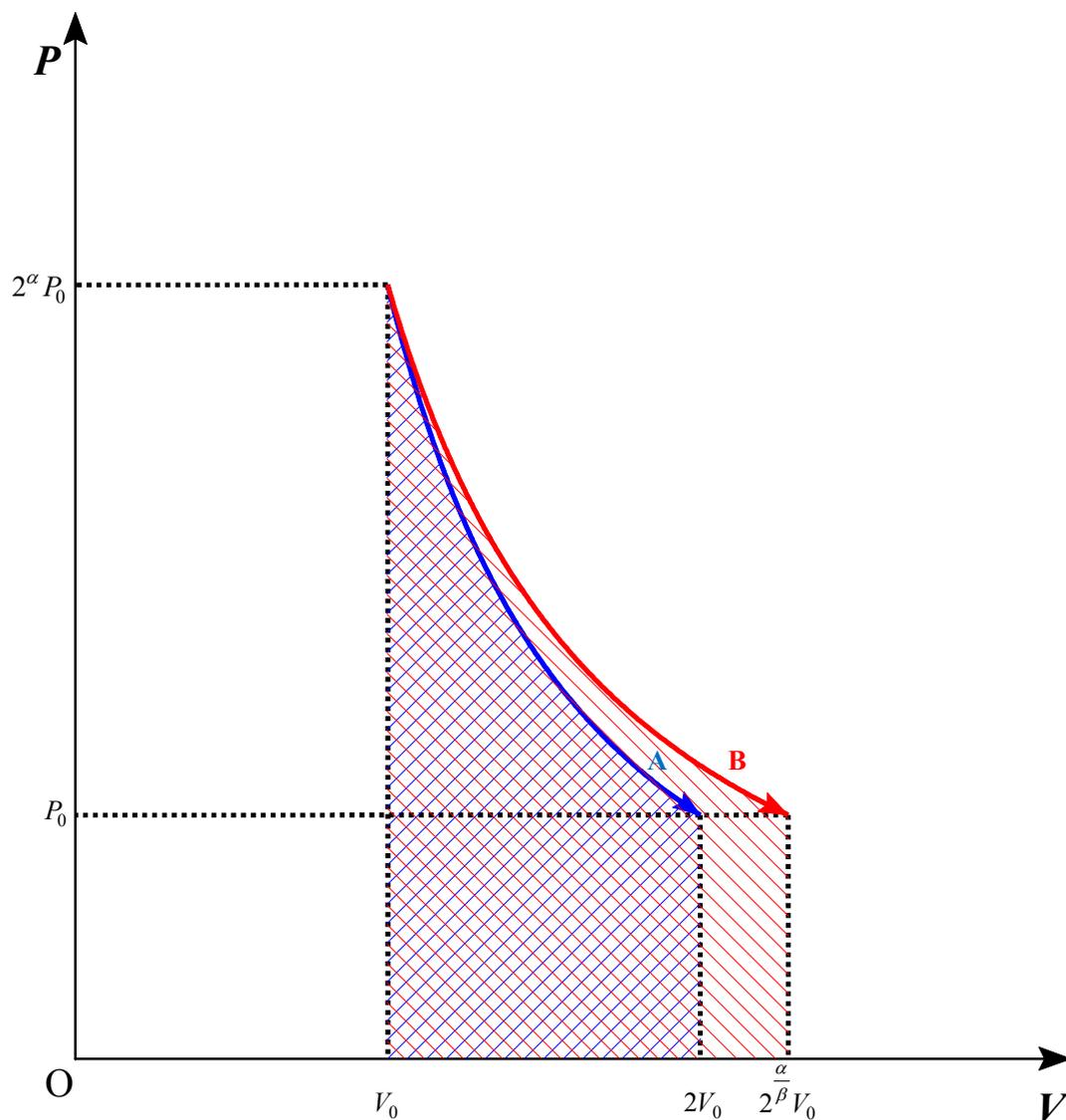
領域 B の気体は, $PV^\beta = 2^\alpha P_0 V_0^\beta$ ($V_0 \leq V \leq 2^{\frac{\alpha}{\beta}} V_0$, $\alpha = \frac{5}{3}$, $\beta = \frac{7}{5}$) を,

すなわち $P = 2^\alpha P_0 \left(\frac{V_0}{V}\right)^\beta$ ($V_0 \leq V \leq 2^{\frac{\alpha}{\beta}} V_0$, $\alpha = \frac{5}{3}$, $\beta = \frac{7}{5}$) を満たしながら

$(2^\alpha P_0, V_0)$ から $\left(P_0, 2^{\frac{\alpha}{\beta}} V_0\right)$ へ断熱変化する。

始点は両方とも $(2^\alpha P_0, V_0)$, V が同じ値のとき $2^\alpha P_0 \left(\frac{V_0}{V}\right)^\alpha < 2^\alpha P_0 \left(\frac{V_0}{V}\right)^\beta$, $2^{\frac{\alpha}{\beta}} V_0 > 2V_0$

より, 領域 A の気体がした仕事に相当する面積は領域 B のより小さい。



補足

定量的解法ではどうか？

領域 A の気体のした仕事を W_A ，内部エネルギー変化を ΔU_A

領域 B の気体のした仕事を W_B ，内部エネルギー変化を ΔU_B とすると，

$$0 = \Delta U_A + W_A \quad \therefore W_A = -\Delta U_A$$

$$0 = \Delta U_B + W_B \quad \therefore W_B = -\Delta U_B$$

$$-\Delta U_A = -\frac{3}{2}(P_0 \cdot 2V_0 - 2^\alpha P_0 \cdot V_0) = \frac{3}{2}(2^\alpha - 2)P_0 V_0$$

$$-\Delta U_B = -\frac{5}{2}\left(P_0 \cdot \frac{\alpha}{2^\beta} V_0 - 2^\alpha P_0 \cdot V_0\right) = \frac{5}{2}\left(2^\alpha - 2^{\frac{\alpha}{\beta}}\right)P_0 V_0$$

関数電卓で計算すると， $W_A < W_B$ となるが，これは無理っぽい

参考図

